

冷徹上司は残業の秘書をクンニと甘い声で
毎晩イカして離さない

R18

2026
・
10
・
2

本文

目次

金曜の夜九時を過ぎると、営業部のフロアは空調まで弱くなる。

残っている明かりは白峰みおのデスクのランプと、奥の部長席だけだった。

みおは来週の役員会の資料を直していた。画面の数字がにじんで、あくびが出る。手で隠したけれど、間に合わなかった。

「白峰」

後ろから低い声がした。

氷室玲一が立っていた。片手に紙コップのコーヒーを持っている。それを黙ってみおのデスクに置いた。

「残りは」

「あと少しです。三十分くらいで」

「さっきも三十分と言った」

「……すみません」

営業部長の氷室は昼間はこういう話し方しかない。

会議でも人の顔を見ない。用件だけ言って、次の資料をめくる。

新卒で入って四年、そのうち二年を秘書として隣で過ごしても、みおはこの人が笑ったところを見たことがなかった。

先月、給湯室で彼のマグカップを来客用と間違えて洗ってしまった。翌日、何も言われなかった。

怒っていないのか、怒るほどの相手でもないのか。みおにはいまだに分からない。

「君は今週、ずっと終電だ」

「役員会が近いので」

「効率が落ちている。二枚目の表、合計がずれている」

みおは慌てて画面に戻した。本当にずれていた。足す列をひとつ間違えている。

恥ずかしくて、耳まで熱くなる。

「すぐ直します」

「直さなくていい」

氷室はネクタイの結び目に指をかけて、ぐっとゆるめた。

みおは思わず見てしまった。この人が人前で襟元を崩すのを、初めて見た。

椅子の背をつかまれた。

くるりと回されて、みおは氷室と向き合う形になった。氷室はそのまま、みおの足元に片膝をついた。

「ぶ、部長？」

「先にイカせる」

「え？」

「頭が回っていないときは、先に体を楽にしたほうが早い」

言っている意味がすぐには分からなかった。

氷室の両手がみおの膝に置かれて、ようやく分かった。

「嫌なら椅子を戻せ。俺は席に帰る」

俺、と言った。

昼間は「私」としか言わない人だ。

みおの手はひじ掛けを握ったままだった。

椅子を回せば終わる。分かっているのに指が動かない。

この二年、資料を渡すたびに指を見ていた。電話を取る横顔を見ていた。見ているだけで終わると思っていた。

「……戻さないのか」

「……戻しません」

氷室が顔を上げた。

目が合った。眼鏡の奥の目がふっと細くなる。

「えらいな、みお」

声が違った。

さっきまでの冷たい声はどこにもない。低くてやわらかい声が、
耳の奥をなでた。

名前を呼ばれたのも初めてだった。

（うそ……誰、この声……）

膝を開かれる。タイトスカートが腰までずり上がった。

ストッキングの上から内ももに唇が当たる。熱い息がかかって、みおの腰がびくんと跳ねた。

「あっ……」

「声は我慢しないでいい。この階は、もう俺たちだけだ」

「で、でも、警備の人が」

「巡回は十時。まだ来ない」

氷室の指がストッキングのゴムにかかった。

ショーツごと、ゆっくり下ろされる。パンプスが床に転がった。

そのまま片足ずつ抜かれる。

ひんやりした空気が、ぬれたまんこに触れた。

「もうぬれてる」

「こ、これは」

「ほら」

指が割れ目をなぞった。くちゅ、と小さな音がする。

自分の体から出た音だと分かって、みおは両手で顔をおおった。

「顔を隠さない。俺を見てろ♡」

「むり、です……っ」

「見せて。みおのまんこ、ちゃんと♡」

そんな言葉をこの人が言うなんて。

頭が追いつかないまま、両膝をひじ掛けの上に乗せられた。椅子の上で脚が大きく開く。全部、見られている。

氷室が眼鏡を外して、デスクに置いた。

それから、顔を寄せた。

ちゅ、と音がした。

クリトリスに唇が吸いついていた。

「ひあっ♡」

声が出た。

舌先が、クリの上を小さく往復する。ちろちろ、ちろちろ、ちろ

ちろ♡

熱くて、ぬるぬるしている。指とはまるで違った。

「あつ、あつ、ぶちよ、そこ、だめ……っ♡」

「ここ、気持ちいいんだろ♡」

「きもち、いい、けど……っ♡」

「正直でえらい♡」

褒められた。

仕事では褒めてくれたことのない人に、こんなことで褒められて
いる。

それがたまらなく恥ずかしくて、なのにお腹の下がきゅうつと熱
くなった。

舌が下へおりていく。

割れ目をなめ上げて、入り口をくすぐって、またクリに戻る。

ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃじゅるるっ♡

静かなフロアに水の音ばかりが響いた。

（だめ、音、やらしい……♡ 部長が、私の、なめてる……♡）

指が入ってきた。

ぬぷ、と根元まで沈んで、中でくいと曲がる。お腹の裏側を押されて、みおの足の指が丸まった。

「ひっ♡ な、なか、やっ……♡」

「狭いな。指、締めつけてくる♡」

「いわ、ないで、くださ……っ♡」

「みおのまんこ、すごく熱い♡」

くちゅくちゅくちゅくちゅ♡

指が中をかき回して、舌がクリを吸う。

両方いっぺんにされて、腰が勝手に浮いた。椅子がぎし、と鳴る。

「あ、あ、あっ、だめ、くる、きちゃう……っ♡」

あと少し、というところで舌が離れた。

指も止まった。

「え……?」

「まだだ♡」

「な、なんで……っ」

「さっきの表。合計がずれた理由を言ってみろ」

急に昼間の声だった。

みおは涙目で氷室を見下ろした。口の周りをぬらしたまま、彼は平気な顔をしている。

「い、今、そんなの……っ」

「言えたら続きをする」

「……た、足す列を、ひとつ、間違えて……」

「正解」

甘い声に戻った。

ごほうびのようにクリをきつく吸われる。

「ひゃあぁっ♡♡」

「ちゃんと分かってる。眠くて手がすべっただけだ。お前は仕事ができる♡」

「あ、あっ、いま、ほめな、いで……っ♡」

「褒める。褒められると、ここがきゅっとなる♡ かわいい♡」

じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷ♡

指が増えた。中がいったいに広げられる。

舌はクリを離さない。吸って、転がして、また吸う。

「ぶちよ、ぶちよお、も、だめ、ほんとに……っ♡♡」

「いいよ。イけ、みお♡」

その声で落ちた。

「あゝっ♡♡ い、いく、いっちゃ……っ♡♡♡」

背中が反った。

中がぎゅうぎゅうと指を締めつけて、膝が震える。目の前がちかちかして、息ができなかった。

氷室は最後まで舌を止めなかった。びくびく跳ねるクリをやさしくなめ続けている。

「ん、んんっ♡ も、もう、いった、イきました、からあ……っ♡」

「知ってる。上出来だ♡」

やっと口が離れた。

みおは椅子の上でぐったりして、天井を見た。蛍光灯は全部消えている。暗い天井に、デスクのランプの明かりだけが丸く映っていた。

氷室は手の甲で自分の口をぬぐった。それから、ハンカチでぬれたまんこをていねいにふいて、眼鏡をかけ直した。

ひじ掛けから脚を下ろされる。膝に力が入らなかった。

氷室が立ち上がった。スラックスの前がはつきり盛り上がっている。みおはそこから目をそらせなかった。

「あの、部長は……その……」

「俺はいい」

「でも」

「今夜はお前を楽にしたかっただけだ」

氷室は自分のジャケットをみおの膝に掛けた。むき出しの脚が隠れる。

そして、みおのキーボードに手を伸ばし、表の列をひとつ直した。合計がぴたりと合う。キーをひとつたたいて、保存した。

「残りは月曜でいい。帰れ」

冷たい声だった。

ネクタイもいつの間にか締め直している。さっきまでみおのまんこをなめていた人と、同じ人には見えなかった。

「……あの」

「何だ」

「ありがとうございました」

言ってから、何のお礼なのか自分でも分からなくなった。氷室は少し黙って、それから部長席のほうへ歩き出した。

「月曜、十八時。会議室Bを押さえてある」

「……議事録ですか」

「残業だ」

背中を向けたまま、彼は言った。

耳の後ろが赤かった。

月曜の朝、みおはエレベーターの鏡で自分の顔を確認めた。

普通の顔をしている。たぶん。

土日のあいだ、あの声が耳から離れなかった。

えらいな、みお。

思い出すたびに布団の中で足をばたつかせて、夜は自分の指で触ってしまった。ちつとも足りなかった。

フロアに入ると、氷室はもう席にいた。

「おはようございます、部長」

「ああ。十時の来客、資料は」

「デスクの右に置いてあります」

「分かった」

顔も上げない。

資料をめくる指に、つい目がいく。みおはあわてて目をそらした。

いつもどおりだった。金曜の夜は夢だったのかもしれない、とみおは半分本気で思った。

給湯室でお茶をいれていると、営業事務の田村さんが入ってきた。ひとつ上の先輩で、よくお菓子を分けてくれる。

「白峰さん、金曜も遅かったでしょ。警備さんが言ってた」

「役員会の資料が終わらなくて」

「部長と二人で？ 怖くない？」

「怖いですよ。合計がずれてるって怒られました」

「うわあ」

田村さんは笑って、自分のカップにお湯を注いだ。

「そうだ。経営企画の公募、また出るらしいよ。白峰さん、春に受けたやつ」

「……そうなんですか」

「今度は私も出そうかなって。事務のままだと、お給料上がらないし」

春、みおは書類で落ちた。

推薦の欄は空けたまま出した。あの人に頼む勇気がなかった。だから、落ちたことも言っていない。

「白峰さんは？　また出す？」

「まだ、決めてないです」

「そっか。部長が手放さないか」

冗談のはずなのに、みおは急須を持つ手を止めてしまった。

昼の会議で氷室はみおを見なかった。

資料を渡すとき、指先が触れた。それだけでみおは自分のボールペンを落とした。氷室は拾いもせずに次のページをめくった。会議のあとで床を探したけれど、ペンは見つからなかった。

（やっぱり夢だったのかな）

十八時ちょうどに内線が鳴った。

「会議室B」

それだけで切れた。

会議室Bは廊下の突き当たりにある。

ガラスの天板の長いテーブルを、椅子が囲んでいる。廊下側はドアの横だけがすりガラスで、通る人の影がぼんやり映る。テーブルの奥のほうは、廊下からは見えない。

みおが入ると、氷室は内側から鍵をかけた。窓のブラインドも下ろしてある。

「座れ」

「はい」

「椅子じゃない。テーブルに」

みおはテーブルのいちばん奥の端に腰をのせた。ガラスが冷たくて、ものの裏がひやりとする。

氷室はその正面に椅子を引いて、座った。目の高さにもおの胸がくる。

「土日、何をしていた」

「え……洗濯とか、です」

「それだけか」

「……」

「言えないことをしたな♡」

甘い声に変わった。

みおの背中がぞくりとした。夢じゃなかった。

「自分で触っただろ♡」

「……っ、なんで」

「朝から、俺の手ばかり見ていただろ♡」

見抜かれていた。顔から火が出そうだった。

「どうだった。自分の指は♡」

「……足り、なかったです」

「正直でえらい♡」

ブラウスのボタンが上から外されていく。

ブラのホックも外されて、胸がこぼれた。会議室の明かりは全部

ついている。

「や、明るい……っ」

「明るいところで見たかった。きれいだ♡」

右の乳首に唇がかぶさった。

ちゅう、と吸われる。舌が先をくるくるとなでる。

「んっ♡ あ……っ♡」

左は指でつままれた。

こりこりこりこりこり♡

やさしいのに逃がしてくれない。乳首がどんどん硬くなっていくのが、自分でも分かった。

「胸、弱いんだな♡」

「しら、ない、です……っ♡ こんな、されたこと……っ♡」

「じゃあ俺が教える。覚えような♡」

ちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅうっ♡

吸われるたびにお腹の下までびりびりと響く。

触られていないのに、まんこがじんじんしてきた。みおは膝をこすり合わせた。

「下も欲しくなった？♡」

「……っ」

「口で言って。みお♡」

「……ほしい、です……なめて、ください……っ♡」

言えた。自分で言ってしまった。

氷室が小さく笑った。息が乳首にかかる。

「上出来だ♡」

スカートをめくられた。ストッキングとショーツをまとめて下ろされて、片足だけ抜かれる。

氷室は椅子に座ったまま、みおの腰を引き寄せる。テーブルの端ぎりぎりまでお尻が出た。両足は彼の肩にのせられる。みおは後ろに片手をついて、体を支えた。

ぬるり、と舌が入ってきた。

金曜は、なめられたただだった場所だ。

「ひゃっ♡ な、なか、舌……っ♡」

熱い舌が浅いところを出たり入ったりする。

ぬぽぬぽぬぽぬぽじゅるるっ♡

鼻先がクリに当たって、そのたびに腰がびくつく。

「んあっ♡ あっ、あっ、ぶちよ、それ、へん、へんになる……

っ♡」

「なっっていい。みおのまん汁、甘い♡」

「や、やだ、のまないで……っ♡」

「飲む。全部俺のだ♡」

じゅるじゅるじゅるじゅる♡

わざと音を立てられている。恥ずかしくて、気持ちよくて、みおは空いた手で氷室の髪をつかんだ。

そのとき、廊下で足音がした。

「——でさあ、来週の見積もり」

「あれ部長に出した？」

営業の男性たちの声だった。ドアの横のすりガラスに人影が並んで映る。

みおは息を止めた。

氷室は止まらなかった。

舌が抜けて、かわりに指が入ってくる。くちゅ、と音が鳴った。

（うそ、うそ、だめ、聞こえちゃう……っ）

みおは髪をつかんでいた手を離して、その手の甲をかんだ。

指が中でゆっくり曲がる。お腹の裏の、いちばん弱いところを押してくる。

親指がクリに乗った。くるくる、くるくる、と円をかく。

「……っ♡ ……んっ♡ ……っ♡♡」

「白峰さん見た？ 今日も残業かな」

「部長に捕まってんじゃない？ 可愛いそうに」

人影がドアのすぐ前で止まった。

みおのものが震える。氷室は下からじっとみおの顔を見上げていた。

口の形だけで言う。

イけ。

「……っっ♡♡♡」

声は出さなかった。出せなかった。

喉の奥で悲鳴がつぶれて、涙がぼろっとこぼれた。体だけが、がくぐくと跳ねて、中が指をしぼり上げる。テーブルのガラスがかたかた鳴った。

「今、何か音した？」

「空調だろ。行こうぜ」

足音が遠ざかっていった。

みおはやっと息を吐いた。指がぬるりと抜けていく。

「はあっ、はあっ……ひどいです……っ」

「よく我慢した。えらいな♡」

「えらく、ない……っ、ばれたら、どうするんですか……っ」

「ばれなかった。お前が声を殺せたからだ」

氷室は立ち上がって、みおの涙を親指でぬぐった。

それから、また椅子に座り直した。

「もう少し、いけるな♡」

「え、ま、まって、いま、いったばかり……ひああっ♡♡」

クリに吸いつかれた。

敏感になったところを、ちゅうちゅうと吸われる。指がまた入ってきて、さっきより速く動いた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

「あゝ♡ だめ、だめだめ、つよ、い……っ♡♡」

「あいつらはもういない。今度は声、聞かせて♡」

「ぶちよ、ぶちよおっ♡ また、またくる、きちちゃ……っ♡♡」

「いいよ。みお♡」

「いっ……くううっ♡♡♡」

さつきより深かった。

腰が浮いて、ぷしゃっ、と何かが吹き出した。氷室のあごからワイシャツの胸まで、びっしりぬれる。

みおは何が起きたのか分からなくて、ぼうっとそれを見ていた。

「……あ……ご、ごめんなさ……シャツ……」

「いい。替えはロッカーにある」

氷室は平気な顔で、ぬれたシャツを見下ろした。それから、ほんの少し口の端を上げた。

「潮まで吹くとは思わなかった♡」

「い、言わないでください……っ」

氷室はハンカチでみおのももをふいて、ブラのホックを留め直した。

ブラウスのボタンを、彼の手が下から留めていく。

みおはテーブルに座ったまま、彼のスラックスの前を見た。金曜と同じだ。硬く張っている。

「部長」

「何だ」

「私ばかり、です。金曜も、今日も」

「不満か」

「……不公平、です」

氷室の手がいちばん上のボタンで止まった。

「俺の番は、お前が自分から来たときだ」

「自分から……？」

「明日。終電を逃せ。地下二階の駐車場にいる」

冷たい声に戻っていた。

でも、ボタンを留める指はさっきよりも遅かった。

「来なければ、それで終わりだ。そのときは、ただの上司に戻る。評価にも響かせない」

「……」

「返事はいらない」

氷室は鍵を開けて、先に出ていった。

テーブルの上に黒いボールペンが残っている。昼にみおが落として、探しても見つからなかったペンだった。

みおはシューズとストッキングをはき直して、ペンを握った。それからスマホを出した。

乗り換え案内を開く。終電は零時八分。

いつもかけているアラームを、みおは指で消した。

火曜の深夜、零時八分。

みおは自分のデスクで、スマホの時計が九分になるのを見ていた。

終電が出た。

アラームは鳴らなかった。昨日、自分で消したからだ。

昼間の氷室はいつもと何も変わらなかった。

夕方に議事録を出したときも、目を通して「ここ、主語が抜けている」と言っただけだ。来るのかとも、待っているとも言わない。

来なければ終わり。あの言葉は本気なのだと思った。

みおはパソコンを閉じて、かばんを持った。

エレベーターで地下二階のボタンを押す。指が少し震えた。

駐車場はコンクリートと排気の匂いがした。

車はほとんど残っていない。いちばん奥の柱の横に黒いセダンが
停まっている。

近づく、助手席のロックが外れる音がした。
みおはドアを開けて、乗りこんだ。

「……来ました」

「ああ」

氷室は運転席でハンドルに片手を置いたまま、前を見ていた。
ジャケットは脱いで後ろの席に掛けてある。

「終電は」

「逃しました。自分で」

「そうか」

短い返事のあとで、氷室は長く息を吐いた。

肩が少し下がったように見えた。

(……もしかして、緊張してた？　この人が？)

「みお」

あの声だった。

氷室の体がこちらを向いた。大きな手がみおの頬を包む。

唇が重なった。

あんなことまでされたのに、キスは初めてだった。

やわらかく吸われて、舌が入ってくる。コーヒーの苦い味がした。

「ん……っ♡ ふ、あ……♡」

「来てくれて、うれしい♡」

そんなことを言う人だったんだ。

みおは胸がいっぱいになって、彼のシャツをつかんだ。

「部長。昨日、私、言いましたよね。不公平だって」

「言ったな」

「今日は私がします」

氷室の眉が上がった。

「したことは」

「……ないです。上手じゃないと思います」

「上手じゃなくていい。お前がしたいなら♡」

「したい、です」

氷室は運転席をいちばん後ろまで下げて、背もたれを少し倒した。

みおは助手席から身を乗り出す。あいだのひじ掛けが邪魔で、届かない。みおは靴を脱いで、助手席に膝立ちになった。そこから運転席へ体を倒す。

ベルトを外す。手もたついて、金具がかちゃかちゃ鳴った。

ファスナーを下ろすと、下着の布が大きく押し上げられていた。

そつと布を下げる。

ぶるん、と跳ねるように出てきた。

（お、おつきい……っ）

思っていたより、ずっと太い。先は赤くふくらんで、透明な汁がにじんでいる。

金曜も昨日も、これをずっと我慢していたのだ。

「怖いかな」

「……びっくり、してます。部長の、ちんぽ……こんなに、おつきいんですね」

「そうだ♡ みおのせいで、ずっとこうなってる♡」

握ってみた。熱くて、硬くて、手の中でどくんと脈を打つ。指が回りきらなかった。

「どう、すれば……」

「先をなめて。あめみたいに♡」

言われたとおりに舌を出した。

ぺろ、と亀頭をなめる。しょっぱい。男の人の匂いがする。

「ん……♡」

「そう。上手♡ くびれのところも♡」

ぺろぺろぺろちろちろ♡

カリの段になったところを舌先でなぞると、頭の上で氷室の息がつまった。

(……あ。いま、感じた?)

うれしくなつて、同じところをしつこくなめた。

ちんぽがぴくんと跳ねる。先から汁がとろりとあふれてくる。それもなめ取った。

「くわえてみて♡ 齒は当てないように♡」

「は、い……あむ……っ♡」

口を大きく開けて、先をふくんだ。

あごが外れそうだった。亀頭だけで口の中がいっぱいになる。

「んむ……っ♡ ん、んう……♡」

「むりに奥まで入れなくていい。手でしごいて♡」

根元を握って、上下に動かす。口は先を吸う。

じゅぽじゅぽじゅぽ♡

よだれがあふれて、さおを伝って落ちた。

氷室の手がみおの髪をなでた。

耳に髪をかけて、頬を指の背でなぞる。

「みおの口の中、あったかい♡ 気持ちいい♡」

「んんっ♡」

褒められるたびに、まんこがきゅんとする。

触られてもいないのに、ショーツがぬれていくのが分かった。

腰が勝手にゆれていた。それを、上から見られていた。

「お前も、欲しくなってるな♡」

氷室の左手がみおの背中をおりていった。

スカートをめくり、ストッキングのゴムをくぐって、お尻のほうからショーツの中に入ってくる。

くちゅり。

「んんーっ♡♡」

「びしょびしょだ。俺のちんぽをなめてるだけで、こんなに♡」

「んむっ、ぷあっ♡　だ、だって……っ♡」

「口、止めない♡」

またくわえた。

後ろから指が入ってくる。ぬぷぬぷと奥まで届いて、中をこする。

じゅぽじゅぽじゅぽ♡ くちゅくちゅくちゅ♡

口と、下と、両方から音がする。

気持ちよくて、頭がぼうつとして、しゃぶるのが雑になった。それでも、氷室は怒らなかった。

「上手、上手♡ みお、そのまま♡」

「んぶっ♡ んっ、んんっ、んううっ♡♡」

指が速くなった。

お腹の裏をとんとん、とんとん、とたたかれる。

みおは鼻で息をしながら必死に吸いついた。舌をカリに巻きつける。

「……っ、みお。もう出る、口を離せ」

初めて、声がかすれていた。

みおは首を横に振った。離さなかった。

「ばか、お前……っ、く……ッ♡」

びゅるるるっ♡

口の中でちんぽが跳ねた。

熱い精液が喉の奥に当たる。どぷ、どぷ、と止まらない。

量が多くて、口の端からあふれた。苦い。どろどろしている。

その瞬間、中の指がぐつと奥を押した。

「んんんーっ♡♡♡」

みおもイった。

ちんぽをくわえたまま、腰が、がくがく震える。指をぎゅうぎゅう

締めつけた。

ごくん。

喉が勝手に動いて、飲みこんでいた。

「……はあっ、は……っ♡」

口を離すと、白い糸が引いた。

氷室は座席にもたれて、肩で息をしている。前髪が乱れて、目の周りが赤い。

会社でこの顔を知っているのは、きっとみおだけだ。

「……飲んだのか」

「飲みました」

「ばか。離せと言っただろう」

「離せ、とは言われました。飲むな、とは言われてません」

氷室は何か言いかけて、やめた。

指がぬるりと抜けて、みおの腰がもう一度跳ねた。

氷室はダッシュボードからティッシュを出して、みおの口の周りをふく。手つきがやけにいていねいだった。

「あの」

「何だ」

「ありがとうございました」

また言ってしまった。

みおは自分の口を押さえた。お礼を言う癖が、こんなときにまで出る。

氷室が吹き出した。

声を出して笑っていた。

肩を揺らして、目じりにしわを寄せて。二年隣にいて、初めて見る顔だった。

「礼を言うのは俺のほうだ」

「わ、笑わないでください」

「むりだ。お前、かわいすぎる♡」

氷室はファスナーを上げて、背もたれを起こした。みおはふらつく足で靴をはき直した。

氷室はみおをアパートまで送ってくれた。

信号で止まるたびに、彼の左手がみおの手を握る。青になると離れる。

「白峰」

大通りを曲がったところで氷室が言った。仕事の声だった。みおは反射で背すじを伸ばした。

「土曜、大阪。取引先の新工場の完成式典だ。同行を命じる」

「はい。資料はそろえてあります」

「一泊になる。夜に会長との会食がある」

「はい」

「部屋は別々に取ってある。どっちで寝るかまでは、命令しない」
返事ができないうちに、アパートの前に着いた。

車を降りて、角を曲がるテールランプを見送った。

部屋に入って、洗面所の鏡の前に立つ。唇が少しはれていた。

口の中に、まだあの人の味が残っている。

歯ブラシを持ったまま、みおはしばらく動けなかった。

結局、みがかずにコップへ戻した。

奥付

作品名 冷徹上司は残業の秘書をクンニと甘い声で毎晩イかせて離さない

サークル いい子指導室♡

発行日 2026・10・2

レーティング R18